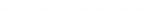


2017 「北の大地」-風の記憶-
タンチョウと愛山溪縦走



2017「北の大地」 行動軌跡

- バイク 
- 徒歩 
- 電車 
- 船 
- 車(バス) 
- カヌー 



表紙 比布岳より安足間岳

裏表紙 カンパーナ六花亭・ギャラリー「神々の遊ぶ庭」より

7月9日(日)

自宅ー仙台南部・東部自動車道ー仙台港フェリーターミナルー～太平洋フェリー「きたかみ」～

(25km)

この時期の仙台は、やませが入る影響で根室の次に気温が低いのが普通だが、この日の仙台は32度の猛暑で、ジャンパーを着るのも暑苦しかったが、「とかち」をはじめ、全員に見送られて出発した。

我が家から仙台南部道路のインターまで5分もかからない。高速に乗ってしまえば、仙台港フェリーターミナルまでは25分で到着する。既に10台のハーレーが到着していた。どうやらグループらしく、それも平均年齢が高そうな人達だ。ハーレー乗りは群れを作りたがるような傾向があり、話しかける気にもなれない。ターミナル内は人がまばらで、今日の船は混んでいないようだ。外は暑いのでターミナル内の待合室でしばらく休んでいたが、冷房が効きすぎて寒くなったので、駐車場に戻ったら、おびたしい数のバイクが列を作っていた。30台以上はある。

自分の後ろの人が、「ハーレーのグループですか」と話しかけてきた。10台のハーレーのすぐ後ろに並んでいれば、そう思われるのが当たりまえだ。自分は一人だと言うと、「自分もソロで1ヶ月半の予定で初めて北海道に行く」と言っていた。自分よりはるかに若いようだったが、うらやましい話した。郡山から猛暑の中を2時間かけて走ってきたスポーツスターの人だった。まだルートを決めていないと言いながら、手作りの北海道地図を見せてくれたが、それには綿密に調べたメモがビッシリと書き込まれていた。しかし、そのメモの内容と実際の場所がかなりずれている。真新しいマップルを持っていたので、プランニングマップを利用すると便利だよと教えたら、買ったばかりでまだ見ていないとのことだった。場所のズレを直してやり、106号線とエサヌカ線を追加してやった。先ほどから、彼のバイクのハンドルバーに色々なモノが付いているのが気になっていた。ナビが2台付いていたので、なぜ2台なのかと聞いたら、「ナビは信用できないから」と意味不明のことを言っていたが、だったら最初からナビなど頼らなければよいのにと思ったし、実際、北海道を走るのにナビなど必要ない。見慣れないモノも付いていたので、これは何だと聞いたら、ドライブレコーダーだと言っていた。どうやら自分とは違う次元の人のようだ。乗船時には、バイクは更に増えて50台ぐらいになっていた。



夕食は持ち込みを考えていたが、バイクに積み込む余裕がなかったのと、32度の高温を考えて、久しぶりにレストランを利用した。以前と比べると随分粗末なものになったものだ。ビュッフェ形式に並ぶ品数も内容も乏しく、飲み物はビールしかない。「日本酒とワインは無いのか」と聞くと、「外の売店で買ってきてください」と言う。つまり、レストランへの持ち込みが可能ということだ。どうしてこんなことになったのだと従業員に聞くと、「きたかみ」だけがこのようになったと言っていた。料金は1500円と安くなったが、スーパーで1500円出したら相当なものを買える。ロビーでうたた寝をしてからB寝台に戻って寝た。

7月10日(月)

苫小牧港フェリーターミナルーR234ー岩見沢ICー(道央道)ー比布ジャンクションー(旭川紋別自動車道)ー
上川層雲峡ICーR39ー層雲峡温泉 (ホテル雲井) (250km)

客が少ないこともあり、朝食はレストランを利用したが、品数があまりにも少なく淋しい。自分としてはこれでも十分だが、さすがに他の船に見られるような船旅目的の人達は皆無で、船内は空いていて寛げる。いくら「きたかみ」は古い船でも、もう少し営業努力をしてもよさそうだ。旅行業者は人気のある新造船の「きそ」と「いしかり」に船旅を楽しむ目的の客を集め、「きたかみ」は見放したのだろうか。しかし、自分のように苫小牧まで運んでくれるだけで良いと思う人にとっては、早割の半額チケットも入手し易く助かる。同室の人は、雌阿寒岳、斜里岳、羅臼岳、利尻山の100名山登山の人だった。ある個人が勝手に決めた100名山に登ろうとする人達があまりにも多く、それを商売にしている人達も現れ、地域活性化には一役担っているようだから、それはそれで良いのかも知れないが、自分はそんな気にはなれない。

札幌までの道央道は交通量が激しいので、R234を北上し、岩見沢から高速に乗った。ここが北海道かと思いたくなる33度の熱さに閉口する。岩見沢Pで休憩していると、新潟ナンバーのハーレー軍団がきた。小樽港から走ってきたようだ。真新しいハーレーばかりで、歳も50台の人達だ。そう言えば、自分のハーレーは、もう16年目を迎える。新型ハーレーと比べるとクラシックの趣だが、“オートバイ”という原点を失っていない。先に出発しようとしたら「気をつけてな！」と声をかけてくれた。

層雲峡温泉には3時半着。いつも利用していた層雲峡YHは今年3月に閉館した。層雲峡という一大観光地にあり、国際色豊かに大いに賑わっていたのにどうしてなのか理解出来ない。特に登山をする人達にとってはその影響は大きい。そんな訳で、今回は、いろいろな意味で有名な「ホテル雲井」に泊まることにした。ネットで検索すると、「ここは泊まってはいけない宿だ」などと書き込む暇人がいるくらい悪評が高い。しかし、自分は何度か利用してきたが、フロントのおばあちゃんの「客を客とも思わない接客」がおもしろく、めげずに話しをすると、人の良いおばあちゃんであることがわかった。そうすると、面倒なことを頼んでも言うことを聞いてくれるのだった。しかし、今年はその名物おばあちゃんはフロントにいない。経営が変わって、若者5人のスタッフで、素泊まりを中心に営業を始めたようだ。客は宿に何を求めるのかによって、評価は大きく分かれる。殿様になったような気分で泊まろうとすれば、前述のおばあちゃんのような接客は到底受け入れられない。しかし、低料金で寝泊まりできて、そのうえ温泉まで入られるのであれば、と考える人達には十分である。しかし、この若いスタッフはまだ慣れないせいか要領が悪い。1年後どうなっているか楽しみである。

山の情報を得るために層雲峡ビジターセンターに行った。ここでは最新の大雪山の情報を知ることができる。センター職員の中年の女性が親切に案内してくれた。銀泉台から愛山溪への縦走を考えているという、愛山溪は是非行って欲しいと、更に詳しく話し始めた。それは、いわゆる大雪連峰の山々とは異なる雰囲気と魅力があることと、沼ノ平も是非探索して欲しいという内容だった。そして、一番重要な山の天気予報では、13日から4日間は安定するようなので、この日程で決行しようと話したら、風の状況も調べてくれて、標高1500m辺りで風速10mとわかった。この時は、強いことは強いが登れないほどではないとあまり気にも留めな

ったが、実際には苦勞することになった。宿のスタッフのリーダーらしき若者に3泊の延泊をお願いした。

7月11日(火)

層雲峡温泉－層雲峡温泉

(ホテル雲井)

(0km)

いつ雨が降るかわからないような天気だし、予報も良くない。登山前に余計なエネルギーも使いたくないので、バイクで走り回ることにはやめた。となれば釣りだが、温泉の上流では今までも何度も釣りをしたことがあるが、バイクは動かしたくない。歩いて行ける範囲で釣りをすることにして、宿からウエダーを着用して川を目指して下った。ザックを背負って登って行く人とすれ違くと、怪訝そうな眼差しを感じた。国道を歩きながら川を見た。かりにも北海道一の大河、石狩川の上流だ。魚がないはずはないと信じてポイントを探した。しかし、温泉街の国道のすぐ傍を流れる川で、釣りをしようとする人はまずいないだろう。しかし、登山待機の時間潰しだから、適当なポイントに降りることにした。笹濁りの流れを見ているうちに、今までの邪念が消え、釣りの本気モードにスイッチが入った。

待望の溪魚アメマス

久しぶりのフライフィッシングなので、準備に手間取ったが、初心者には丁度良い開けた河原で、キャストイングをするにしても後ろに引っかけの心配をしなくても良い。昨年、千歳川のフライフィッシングの師匠からいただいた本田毛針をつけて何度か振っているうちに、ドライフライも飛ぶようになってきた。国道と温泉街に立ち並ぶホテルの高層ビルは背にしているので、目の前には石狩川と対岸の山肌しか目に入らず、山中での釣りのように集中できた。自分でも釣れないだろうなと思いながら、まるでキャストイングの練習のようにフライを打ち込んでいると、魚は突然出てきた。心臓に負担がかかるくらい驚き、すかさず合わせたら、今までフライで釣った魚では一番大きな手応えで魚は走り始めた。雪代水に洗われた30cm弱の綺麗なアメマスだった。今度は少しポイントを上流に変えて振ると、流れる毛針に黒い大きな潜水艦がユックリと浮上してきた。ドキッとしながら合わせたが、ラインは宙を舞ったままだ。毛針が無い。合わせ切れか、ラインの結びが悪かったかだが仕方が無い。本田毛針で再挑戦すると、またまた潜水艦が浮上してきた。今度こそはと反射的にロッドを上げたら、強烈な引きで抵抗し始めた。カンパネラ(岩手製)のロッドは細身でも強靱でしなやかで、強烈な引きを吸収し、呆気ないほどに引き寄せられた。それでも、写真を撮る間、片手でロッドを保持していたが、腕が痺れてきたほどの引きで、なかなか弱らなかつた。自分の釣り道には反するのだが、散々いたぶって(撮影)からハリを外してやった。欲が出てきて、一端国道に上がり、歩きながらポイントを探して釣ったが全く音沙汰無しだった。丁度、昼になったし、雨も降ってきたので宿に急いだ。



待望のアメマス



雪代水の入った川の色は、いかにも魚がいそう



潜水艦の正体は大型アメマス



7月12日(水)

層雲峡温泉—層雲峡温泉

(ホテル雲井) (0km)

今日もひたすら待機の日。北海道にかかっている前線が、東に通過しないことには天候の回復は見込まれない。層雲峡温泉は雨が降っていないので、早朝からロープウェイに並ぶ人は多い。特に、観光バスは6時始発のロープウェイを狙っている。しかし、山の上は荒れているようだ。早々と戻ってくる人達も多い。待つことも大事と久しぶりに宿から出ないで昼寝をした。天気予報が変わって、予定より早く崩れ始めるようだ。そうすると、最終日の一番大事な愛山溪の山行が怪しくなってきた。ならば、山行予定を一日詰めて二泊三日に変更することにした。そうとなれば、食料とかの見直しを図り、幾らかでもザックの重量を軽くしたいので、パッキングのやり直しをした。

夕食は付近の食堂で食べていたが、「溪谷味豚ジンギスカン」があまりにも美味しく二晩続けて食べたが、今晩は別の店に入った。そこは殆どがアジア系の外人の人達で賑わっていた。自分は肉料理を頼んだが、外人のオーダーがおもしろい。オレンジジュースと餃子とか、エダマメだけの人とか。日本人の殆どは2食付きのホテルに泊まっているから、夕食時は素泊まりの宿に泊まっている外人が多くなる。

7月13日(木)

層雲峡温泉(6:00)—(バス)—銀泉台(7:15)…赤岳(2078.5)…白雲岳キャンプ指定地(13:30)

(白雲岳キャンプ指定地)

縦走出発

早めに起きて、バスに乗る前に朝食は済ませた。今朝の快晴に誘われるように、バス停に並ぶ登山者が増えてきた。30人程乗車し、銀泉台までノンストップでバスは走った。このバスの営業が廃止になると、登山者にとってはものすごく不便になるのだが、道北バスは頑張ってくれている。しかし、恐らく赤字路線だろうから、他の路線バス同様に整理される可能性が高い。そうならないことを願っている。

乗り心地の悪いバスに1時間弱揺られて銀泉台に到着した。既に駐車場はマイカーで満車状態になっていた。貸し切りバスで到着したツアー登山のグループが賑やかに準備体操をしていた。この集団が出発してから少し時間をおいて、静かになってからゆっくりと歩き始めた。歩き始めは努めてゆっくりと歩くことにしている。歩き始めの1時間は、体を登山モードにするために大切なのである。最初の休憩地点の前の急坂は、ニセイカウシュッペ山の山並みを眺めながら登ったためか、いつになく楽に通過した。休憩地点にはツアー登山の人達がいて、ガイドが「お先にどうぞ」と言ってくれたが、「自分も休憩するのでお先にどうぞ」と先行を譲った。十分な間合いを取るために、膝から下が着脱式のズボンをショートパンツに切り替えたり、給水と行動食を食べたりして十分に休んだ。

このコースは何度となく歩いているので、コース状況は全て頭に入っている。今日は白雲岳テントサイトまで行けば良いので、時間は十分にある。ほぼ快晴の山行を楽しみながら、時間を気にしないで登ると疲れにくい。第一花園、第二花園はまだ雪の下だったが、コマクサ平では今年もコマクサの群落が見られ、開花時期も丁度良かった。重いザックから解放されて、身軽な状態で写真を撮りまくった。その間、何組かの登山者が通過していったが、写真を1, 2枚撮るだけだった。こんなにコマクサが丁度良いタイミングで咲い



駒草平の可憐な駒草の花

ている所など滅多に無いのだから勿体ないかぎりだ。

ここから、このコース最大の難所の第三雪渓の急坂が白い壁のように立ちはだかっているのが見え、そこにツアー登山の人達が蟻のように一列になってへばりついていて。だいたいの人は雪を見ると、滑るという思いから尻込みするが、自分はむしろ雪渓歩きのほうが、爽

やかで気持ちが良いから好きだ。月山の夏山スキー合宿で30年以上行動してきたので、雪渓上の歩きは、カチンカチンのアイスバーンは別として、舗装路を歩くのと大差ないくらいに歩けるし、特に一番危険とされる下りの歩きは、むしろ雪のクッションを利用できるので疲れにくい。第三雪渓の登り口に立つと雪渓最上部は見えず、真っ青な空が広がっている。一步一步爪先で蹴りを入れるように刻んで登る。どんなに遅くても、



最大の難所の第三雪渓

一步一步足を前に出していれば目的地に着く。第三雪渓を登り終えても、第四雪渓が待ち構えているが、ここは一気に行ける。最後の急坂を、チングルマを眺めながら登り切り、なだらかな斜面になれば赤岳頂上はもうすぐだ。頂上からは、お鉢平を中心とした大雪の山並みが一望できる。特に白雲岳下部からのカール状の景観は迫力と大地生成のドラマを感じさせる。強風を避けるため大きな岩陰を見つけて昼食を食べた。

昼食後、歩き始めて間もなく、チングルマかと思ったら葉が違う。今まで見たいと思っても見られなかったチョウノスケソウだった。残念ながら、花の時期は少々盛りを過ぎていたが、光沢のある葉も美しい。白雲岳分岐に到着した時、気温が高いためか、遠方の山並みに霞がかかっていた。白雲岳に登って旭岳のゼブラを見ようかどうか迷ったが、数年前に、一番良い状態の縞模様を見ているので、それよりも、テン場に早く着いて、良い場所にテントを張ることを優先した。テン場には既に数張り張られていたが、何とか良さそうな場所を確保した。ところが、隣でテント設営の準備にとりかかろうとしていた人の仲間が「軟弱者だから小屋にしよう」という一声で方針変更になり、「ここに張ると良いよ」と譲ってくれた。そこは、さらに良い場所だった。しかし、久しぶりの設営と強風のためになかなか手こずった。仮打ちのペグは強風で簡単に抜けてしまったが、それでも知恵を総動員しながら綺麗に張ることができた。家が出来れば、風を避けて一休みできる。横になりながら、気付け葉のサルナシ酒をグビリと飲めば、五臓六腑に染みわたり、全身に電気が走ったような気分になった。



赤岳頂上より 左が白雲岳、奥が旭岳、手前がカール状の溪谷

チョウノスケソウ





白雲岳キャンプサイトと避難小屋遠景 背景は高根ヶ原とその奥にトムラウシ山



白雲岳キャンプサイト ほぼ完璧な設営 遠景はトムラウシ山

自分のテントの右側で設営しているのが文中の人



自分は早めにテントを張り終わり、夕食までは時間があるので、備え付けの鉄製のテーブルで寛いだ。高根ヶ原に続くトムラウシ山と、その奥に繋がる十勝岳連峰の雄大な景色を眺めながら、サルナシ酒を飲むのは最高の贅沢だった。後から来た人達のテントの張り方を眺めていたが、単独行の人は、風が強いので苦労して張っている。こういう時は2人で作業をすると楽なのだが、ある若いカップルの場合、女性だけがコマネズミのように動き回り、男は見ているだけだった。しかも、その女性の手際の良さには感心するくらいだった。夕食の時、その女性がテーブルの隣にきて、「ここ良いですか」と言って準備を始めた。「テントの張り方要領が良いですね」と話しかけながら、男の人が手伝わないのはどうしてかと聞いたら、「山は慣れていないから、当てにしないんです」と言うことだった。2週間前にも来たと言っていたが、どうやら、女性主導の山行をしているようだ。そして、驚いたことに、その女性は同じ宮城県の人だった。自分は名取市から来たといったら、その女性は近くの丸森町生まれで、高校は角田女子高卒と言いながら、こんな所で会うなんて奇遇ですねと言って思わず話しが盛り上がった。今はニセコに住んでいるらしい。結局、食事も女性一人で食べ、テントに戻って行った。男の人は、隣で話し込んでいる自分を見て、敬遠したのかも知れない。テント料金300円を避難小屋の管理人に支払いに行ったら、今後の日程を聞かれたので、明日は黒岳石室、翌日は北鎮岳から愛山溪温泉に下山と行ったら「シブイですねー」と言われたが、その時はその意味が分からなかった。

7月14日(金)

白雲岳CS…高根ヶ原…白雲岳CS…白雲岳分岐…北海平…北海岳(2149)…黒岳石室CS

(黒岳石室キャンプサイト)

広大な高根ヶ原

まだ暗い時から起きて準備をしている人がいる。テントの中の音は意外に響く。まだ、2時半なのに気が早い人だ。四時を過ぎて、多くの人達が準備を始めたので自分も外に出た。トムラウシの朝焼けが始まろうとしていたが、本来の茜色の濃い朝焼けではない。朝日が少し陰っているようだ。当初の予定では、ここにもう一泊して高根ヶ原の最深部の忠別岳まで往復することを考えていたが、天候のことを考えて一泊短縮したので、高根ヶ原を時間的に行けるところまで行って戻ることにした。朝食をゆっくり食べ、テントも撤収してからサブザックに必要な最小限の物を入れて六時に出発した。高根ヶ原は広大な風衝地帯なので、テントより風が強く、歩きにくいほどだ。初めて高根ヶ原を歩いた時は、あまりにも広い大きな空気の塊に押しつぶされるような、経験したことのない衝撃を味わったが、2度3度となると、さすがにその昂揚感は薄れてしまう。しかし、この高根ヶ原は、恐らく日本では珍しいほどの雄大な広がり尾根歩きを楽しむことができるところだ。ジブリの「天空の城ラピュタ」の最後のシーンの音楽が聞こえてきた。巨大な飛行石が天空に舞い上がっていく、あのシーンである。

ウルップソウは殆ど花が終わっていたが、コマクサは真っ盛りだった。高山植物の女王と言われるが、遠くから見ても、近くから見ても、特異な形状の花びらは魅力的だ。4時間の高根ヶ原探索を終えてテント場に予定通り10時に戻った。避難小屋の前で、40代の女性が一人話しかけてきた。「風が強いので収まるまで待っていたが、あまり変わらないですね。高根ヶ原はどうですか」と言うので、「ここはまるで違うほど強いよ」と言うと、「止めようかな」と言っていた。自分と同じように途中まで行って戻る予定らしい。「だったらザックは置いて、サブザックで行ってきたら楽だよ」と言ったら、ザックには食料も入っているし、無くなったら大変だからと心配していた。

確かに、北海道の山で不用意にザックをデポすることは危険だ。熊が持って行くのである。それを取り返そうとしたら悲惨な結末になる。しかし、小屋の前に置けば大丈夫だよと言ったが、結局、彼女は重いザックを背負ったまま出かけていった。

テン場から白雲岳分岐までの登りは、高根ヶ原を軽いサブザックだけで歩いた直後だけに、重いザックが肩に食い込んで辛い。白雲岳に登ることを考えていたが、景色がクリアでないし、明日の愛山溪のためにエネルギーを残しておこうとやめた。北海平も花盛りだが、以前と比べると写真を撮るのにも欲が出てきて、遠景のトムラウシが少し薄いか、ハクサンイチゲが疎らだとかの思いが先に立ち、心ときめかせながらシャッターを切る回数が少なくなってきた。北海岳からの長い急な下りの途中で、登山には似合わない肥満体の人が、大きなザックを背負って蟻のような速度でタツプリと汗を流しながら登ってきた。この時間にこんな状態で、白雲岳CSまで行けるのかと心配になったほどだ。お鉢から流れ出している赤石川は水量がいつもより多かった。あるグループは登山靴を脱いで裸足になって渡っていた。しかし、裸足は危険だ。偏光グラスを通して見ると、水量の割には底石が安定していたので、ロングスパッツを履いているし、「行ける！」と判断して川幅20mを一気に徒渉した。殆ど水は入らなかったがギリギリだった。後続の二人組も自分が渡ったのを見て続いた。裸足の人達は啞然とした表情で見ていた。

黒岳石室は北海道で唯一管理人が常駐し、小さな売店もあり、トイレはバイオ形式できれいで臭くない。用足しの後、自転車に跨がり、正転で20回、反転で10回漕がなければならない。なんとビールまで販売している。ところが、テン場は遅く到着したこともあり(それでも3時)、良い場所がなかった。それだけ狭いのである。小屋は100人ほど収用できるのに、テント泊が少ないためだろうか。少し傾斜地で寝ている間に転がりそうな場所だったが、昨日より強風の中、何とかテントを設営出来た。自分がテント設営の間、黙って見ていた若い女性が気になっていたが、張り終わったのを見て話しかけてきた。北海道大学の修士課程の1年生と名乗る彼女は、アンケートに協力してくださいということだった。このキャンプサイトは国立公園の中なので、環境省の管轄だろうからそのアンケートかと思ったら、個人的に環境科学を勉強しているためのアンケートだという。早くテント設営後のサルナシ酒を飲みたかったのだが、若い女の子の頼みでもあるので協力することにしたが、そのアンケートの項目の多いことと、内容が不明瞭なことで、逆に自分からの質問が多くなり、それに伴って腹が立ってきた。しかし、アンケートをとるために一人でテントを張って、向学心に燃えている若者の気持ちを大切にと思い、アンケートに答えていったが、最後に「住所とお名前を教えてください」というので、宮城県と言ったら、ペンを止めて、どういう漢字ですかときた。「環境科学を専攻しているのに、宮城県とも書けないのか！」と口に出そうになったが、ぐっと堪えて自分で書くからと言った。北海道の人からみると宮城県とはそんな程度なのだろうか。

夕食は札幌から来たという自分よりは若い男の人と同じテーブルで食べた。ここではビールを販売しているので、山で久しぶりにビールを飲んだ。この男性は仕事の関係で庄内に良く行っていると言うことで話が弾んだ。この人も含め、北海道の山を歩いている人は、男女関わらず単独行が多いのはなぜだろう。熊の脅威もあるのに、北海道の風土がそれにも増して単独行にしているのだろうか。今晚も風が強い。テントが風ではためく音で、飛ばされないか不安になるが、一昨年トムラウシ南沼CSの大嵐を経験しているので、いつの間にか寝たようだ。



朝焼けの高根ヶ原とトムラウシ山(中央奥) 右奥は十勝岳連峰



白雲岳キャンプサイトの朝 背景は白雲岳



朝陽に映えるエゾノキンバイ



エゾツツジ 背景は石狩岳とニペソツ山(右奥)



高根ヶ原の駒草 上下





北海平で一休み



北海岳よりお鉢平(爆裂火口) 右奥は北鎮岳



雪溪の下に咲くエゾノコザクラ



チングルマの群生



黒岳石室のキャンプサイト 左手前が自分のテント 背景は北鎮岳(右)

7月15日(土)

黒岳石室CS…北鎮岳(2244)…比布岳(2197)…安足間岳(2194)…永山岳(2046)

…沼ノ平…愛山溪温泉——層雲峡温泉

(ホテル雲井)

念願の愛山溪

相変わらず風は強いが、予報通り晴れている。テントを飛ばされないように注意しながら撤収し、今日のハードなコースに備え、朝食を十分に摂った。予定通り6時丁度に出発。高山植物の宝庫と言われる雲ノ平を歩きながら、逆光に映えるキバナシャクナゲ、チングルマ、エゾノツガザクラの写真を撮っていると、二人の若い女性が「花が綺麗で先に進めないですね」と言いながら追い越していった。しばらく進むと、先ほどの二人連れが振り向いて手を振っている。「逆光が格好いい」と言っているのので、自分も何だろうと振り向いて見たが特に目立った物はない。そしたら、逆光の中を歩いている自分の姿が格好いいと言い、写真を撮ってくれた。彼女たちは旭岳を越えて、旭岳温泉に泊まる予定と言っていた。



朝陽に輝くキバナシャクナゲ



エゾノツガザクラ



逆光の雲ノ平を歩く 2人組の女性が撮ってくれた 下の写真も



背景は、これから登る北鎮岳



雲ノ平のチングルマ 遠景は北鎮岳



雲ノ平のエゾノツガザクラ 遠景は烏帽子岳(右)



お鉢平展望台より

急斜面の雪渓を巧みに登って行く先行女性
自分と同じように一眼レフを肩に掛けていたが
写真も上手い



お鉢平展望台から爆裂火口のお鉢を眺め、北鎮岳の肩への急坂の雪渓を登り始めた。先ほどの二人連れが中間あたりまで登っていた。転んだら滑落間違いなしの急斜面を巧みにステップを切って登って行った。北鎮岳の肩まで登りきった所で、頂上への最後の急坂を前に、風除けの大岩の陰で休憩をした。ザックをデポしていたので、3名は北鎮岳に登っている。昨年、ここの大雪渓でスノーボードをしていた二人の女性のことを思い出し、改めて、こんな所で滑ろうという発想をよくぞしたものだと感じた。気合いを入れ直して、頂上を目指した。登り始めて三日目となり、体も慣れてきたのか、そんなに苦労することもなく予想到着時間より若干早く頂上に着いた。今年は去年より天気は良いが、去年のガスの晴れ間から見た景色より透明度が低い、トムラウシは勿論、十勝岳連峰、ニペソツ山、石狩岳、これから行く愛山溪の山々が見渡せる。この時点で、北鎮岳は北海道で二番目に高い山なので、後は下るだけと安易な考えをしまい、去年、札幌からの二人の女性と記念写真を撮ったことなどを思い出したりして、頂上を心ゆくまで楽しみ過ぎ、時間を費やしてしまった。

それでも、ここから先は初めてのルートなので、緊張して出発した。ところが、予想以上にどんどん下っていく。それはそれで、初めて目にする景観を楽しみながら下るのは良いが、それだけ比布岳への登りが辛くなる。一度下ってからの登り返しは体に応える。そんな不安もさることながら、旭岳から裾合平にかけての、初めて見る残雪模様の雄大な景観に感激しながらコルまで降りた。地図の読み方が未熟だったこともあり、比布岳までの登りがこんなにあるとは思わなかった。しかし、比布岳の登りは高山植物の宝庫で、写真を撮りながら適当に休み、初めてのルートへの好奇心もあり、気がつけば、いつの間にか頂上に着いていた。途中のエゾノツガザクラの群生は、一面を赤く染める見事なものだった。ここから先のルートは、今までのたおやかな山容のルートと違い、切り立った痩せ尾根の険しいルートとなるようだ。このあたりで、引き返してくる登山者と出会ったが、いずれも愛別岳への登山を諦めて帰ってくる人達だった。ルートガイドにも一般不向きと書いてあるが、頂上直下の登りはほぼクライミングになりそうな山だ。それでも、若かりし頃に登った利尻山の廃道になって久しい鬼脇コースはもっと険しく、途中で立ち往生して失禁しそうになったくらいだった。分岐に一人の若者がいた。4人パーティーで来たが、自分は自信がなくなり、3人が登っているのを見守っているとのことだった。バランスを崩しそうな強風の中で、この山に挑戦している3人はなかなかの人達だ。大雪山にこんな山があるとは知らなかった。あと10年若かったら登る意欲も出たかも知れないが、今回は初めから考えもしなかった。

残雪も付かない急斜面のキレットのトラバースはあまり気持ちの良いものではない。左からは強風、右は完全な断崖絶壁なので、高所恐怖症の人は立ちすくむだろう。やがて、安足間岳の頂上に立ち、少し安心して昼食をとることにした。地図で見ると、ここからはどう見ても下りだけのハズだ。余裕で下山口に到着できると予想したが、これも考えが甘かった。

今日は天気が良いから問題無いが、このあたりでガスがかかったら迷う確率が大きいガレ場が広がっている。永山岳に行くと、50前後の女性2人が頂上で寛いでいた。永山岳の下に広がるお花畑を見に来たが期待外れだったので、ここで愛別岳を眺めていると言っていた。自分が黒岳から来たと言ったら、「比布岳の登りにあるツガザクラは咲いていたか」と聞くので、カメラの映像を見せたら、「やっぱりここはすごい！」と感嘆していた。話からすると、かなり山歩きをしている旭川の2人だった。

ここからの下りは延々と続き、はるか眼下にこれから行く予定の沼ノ平の湖沼群が光っていた。高度を下げるにつれ、登山道はハイマツの中の落差を深め、大岩がゴロゴロする難路となり、ザックの重さと自分の体重がプラスされ、下半身にのしかかってきた。心肺機能はまだ大丈夫だが、大腿二頭筋と背筋の衰えを実感せざるを得なかった。こんな下りでの転倒は大けがに繋がるので、一步一步慎重に時間をかけて降りた。

従って、時間は思いの外かかる結果となった。ようやく川の音が聞こえてきたが、笹藪の中に出来た登山路は、土の部分が流されて、大岩だけが残った歩きにくい道になり、かなりの体力を消耗してしまった。やっと川に降りた所で、子供を含む6人のパーティーに会った。沼ノ平を探索して沢コースを下りると言っていた。自分は層雲峡ビジターセンターで、沢コースは去年の台風で危険な状態になっているので、沼ノ平コースを降りるようと言われたと話したら、リーダーの人は困った顔をしていたが、通行止めにはなっていないので、行けるところまで行って下りていった。自分は川を徒渉して急坂を登って、沼ノ平コースに出ることにした。こういう状態になると、登りのほうが楽だ。やっと沼ノ平に出た。当初の予定では、ここにザックをデポし、沼巡りを楽しむことを考えていたが、時間も体力もない。ビジターセンターの人が「ここにザックをデポはしないこと」と念を押した意味がわかった。この沼ノ平は熊が多いところで、ほとんど人も来ないし、熊に持って行かれる危険が高いことを実感した。

あとは歩きやすい探索路だから1時間半もあれば下山口まで行けると安心したが、最後の最後に罌が仕掛けてあった。三十三曲がりなどというふざけた名が付いた急坂が待っていた。もう下りは嫌だと、背筋が悲鳴をあげている。このような重いザックを背負っての縦走は、体力的に最後かなとすっかり弱気になり、「限界」という二文字が目の前にちらつき始めた。下山口までたどり着けるだろうかという不安がつのってきた。白雲岳避難小屋の管理人が、愛山溪に下りる予定と言った時、「シブイですね」と言った意味がようやく分かった。やっと、あと500mという標識が見えたものの、そこからの500mは気の遠くなるほどの距離に思えた。下山口の箱にしゃがんで下山届を出し、立ち上がったときにクラッと立ちくらみをした。予め手配していた車は来ていたが、とりあえず温泉に入ってくるからと待ってもらった。愛山溪温泉は茶色い塩化物泉で、無事に帰れたことと、大きな達成感を感じながら、湯に浸った。



北鎮岳頂上直下より続く大雪渓 去年、ここを2人の女性ポーターが滑っていた



北鎮岳頂上より旭岳(左)と裾合平



北鎮岳頂上よりお鉢平 遠景にニペツツ山(左) トムラウシ山(右)



北鎮岳頂上より愛山溪方面の山並み 登山路が見える 中央が比布岳



チングルマと愛別岳(右)



比布岳頂上直下のエゾノツガザクラ



比布岳頂上より安足間岳(右トンガリ)と旭岳(左奥)



安足間岳(中央)へのルートが見える



一般の人を寄せ付けない愛別岳への入口



愛別岳への稜線



愛別岳(左)と安足間岳(右)



沼ノ平の湖沼群が鏡のように光っている まだかなり高度差がある



去年の台風で折れ曲がった橋 何とか渡れた

7月16日(日)

層雲峡温泉—R273—三国峠—R273—糠平—R273—D468—R241—足寄—R242—本別IC—
(道東自動車道)—阿寒IC—R240—釧路湿原道路—R391—とうろ

(釧路湿原とうろYH) (212km)

釧路湿原とうろYH三泊

朝から雷雨の天気だ。当初の予定通り、縦走を3泊4日にしていたら、愛山溪へのルートがこの天気では、悲惨な目に遭うか、あるいは遭難していたかも知れない。慎重な判断をしてよかった。雨はそんなに気にしなくてもよいが、雷だけは避けなければならない。車は雷に対して安全だが、バイクは単なる走る鉄の塊だから危険極まりない。

スマホのアメダスで雷雲が去るのを待つことにした。今日は釧路湿原とうろYHまでだから、時間的にも余裕がある。しかし、雷雲は次から次へと流れてくる。合間を縫って走ることにしたが、三国峠手前で雷雲に追いつかれてしまった。幸い雷は鳴らないが、バイク走行では過去に経験がないほどの猛烈な豪雨となった。道路を流れる雨水でハンドルが取られるくらいだ。出発前にヘルメットのシールドにレインブレイカーを念入りに塗ったお陰で、視界確保はできたので走行には支障はなかった。三国峠付近ですれ違ったバイクが3台ほどいたが、それぞれ「やってるなあ！頑張れよ！」というように2度手を振ってきたので、こちらも振り返したが、ハンドルが取られるので危なかった。ゴアテックスの雨具も、4、5年経つと、豪雨の中の80km走行では雨が染み込んでくるのがわかった。

釧路までの新しく開通した道東自動車道は 4000m以上の長いトンネルの連続で、ライダーにとっては煙突の中を走っているようなもので、排ガスのために気分が悪くなった。時間に余裕があれば通りたくない道路だ。

途中から釧路湿原道路に入り、釧路湿原とうろYHに遅くなる旨の電話を入れ、釧路市内は通らずに雨の中を走った。ズブ濡れ状態でYHに着いたが、4年ぶりの女性ペアレントがタオルを貸してくれたので、濡れた雨具などを拭き取り、部屋に落ち着いた。ドミトリーで申し込んでいたが、個室を用意してくれたので、濡れた物を乾かすのに助かった。そして、すぐに風呂に入り、冷えた体を温めて、一息ついた。

夕食は7名で、旅のことなどを話しながら和気藹々とおいしいハンバーグを頂いた。自分と同じテーブルの女性はフルマラソンを走ったり、山も縦走経験のある活動的な、名古屋から公共交通機関利用の人だった。もう1人の男性は東京からの人で自分と同じ歳だったが、かなり日程的に余裕のある旅をしているようだった。食事の



後、女性ペアレントからYHのオプションツアーの説明があり、明日の午前中は湿原探索、明後日は早朝カヌーを予約した。

釧路湿原とうろYH

7月17日(月)

釧路湿原とうろYH—(ガイドの車)—細岡展望台—一本松展望台—コッタロ湿原展望台
—とうろYH—(バイク)—釧路湿原道路—温根内ビジターセンター—釧路湿原道路—塘路
(釧路湿原とうろYH) (100km)

釧路湿原探索

今日の午前中はYHのオプションツアーで、ペアレントのガイドの車で、東京からの男性と名古屋からの女性と3人で釧路湿原探索を行った。出発して間もなく車が止まった。どうしたのだろうと思ったら、すぐ近くにタンチョウのつがいがあった。よく見ると茶色い毛の幼鳥も一緒にいた。急いでカメラのレンズを EF100-400mm に交換して数枚撮ったが、幼鳥が草の陰になり良く撮れないままに林の中に消えた。近くの家の方が餌付けをしているらしいが、野生のタンチョウも安易に餌が食べられる民家の近くにテリトリーを持つようになったらしい。生き物は、人間もそうだが、だいたいは楽な方向へ流れるものだから仕方がないのかもしれないが、餌付けそのものに疑問を感じる。

細岡展望台からの景観は、湿原の広がりだけを見ていると、日本の景色ではない。残念ながら阿寒の山並みは雲がかかっていたので見えなかったが、この雄大は景観には縄文人も感動したに違いない。蛇行して流れる釧路川では、自然色の中にカラフルなカヌーが不自然なく目立った。ガイドがスコープでタンチョウを湿原の中に探して見せてくれたが、湿原の中のタンチョウは格好が良い。展望台付近にはミズナラが多いが、昔、塘路はふんだんにあるミズナラで炭を焼いて、木炭の生産で栄えた町らしい。ミズナラは切っても、切り口から新芽が出るから植林をする必要がないそうだ。我が鳥海山の麓にも、ミズナラの奇形木が多くあるところは、炭焼きをしていた所で、石作りの炭窯も所々に残っている。最近では、林が消えた所に、NPO法人が植林をして、湿原の保水能力を高めようとしているそうだ。「豊かな海は、豊かな森が育てる」の湿原版ということだ。

ペアレントのガイドの話は多弁ではないが、要点を分かりやすく話してくれるので聞いていて楽しい。オオウバユリは8年目で花が咲き、その後枯れるが、根にはクローンが出来ているし、大量の種からも繁殖するので群落が出来るといえる。今まで、この花の臭いなど嗅いだことはなかったが、以外と控え目な上品な香りがした。

前回来た時もそうだったが、この時期、至るところで白い花が目につく。ハシドイとノリウツギの花だ。ハシドイはライラックの仲間で、釧路市の木に指定されている。この木の花が咲いている付近一帯は香水のような香りが漂っている。ノリウツギはアジサイの仲間で、原田康子の「サビタの記憶」で有名になったように、別名サビタの花と言う。サビタという響きに興味があって、ガイドにも聞いたし、ネットでも調べたが分からない。漢字で書くと糊空木で、和紙を作る時に、この樹液を混ぜると、漉いた和紙を重ねても剥がれやすいそうだ。本州のマタタビは裏白だが、北海道のミヤママタタビは裏ピンクだ。このように興味のある話しが尽きない。

二本松展望台からの景色を見て、前回と様子が違うことに気がついた。前は緑の湿原の中にピンク色に染まった部分が目立っていたが、時期的には殆ど同じなのに今回は全く無い。それはホザキシモツケの濃いピンク色の花だ。ガイドはこれから咲くと言っていたが少ないような気がする。それから、湿原の中のヤチハンノキに葉が少なく、立ち枯れしているような異様な光景が広がっている。実際は見たことがないがサバンナのような光景だ。これはハンノキムシにやられたそうだ。本州のナラ枯れやブナ枯れと同じように原因は虫だ。

生産性の全くない不毛の地である湿地なのに、人々が惹かれるのは、生産性ばかりに価値を見いだす文化への心地よい反逆なのだろうか。

午後からは雨も止んでいるので、湿原道路を走り、気の向くままに湿原を北上したが、寒くて温根内ビジターセンターで終わりにし、センター内の見学だけにして、今来た道に戻った。





ホザキシモツケ



ハシドイの花



二本松展望台下を流れる鉏路川 以前は中州がなかった

7月18日(月)

とうろYH-(ガイドの車)-釧路川上流-(カヌー)-塘路湖...とうろYH(朝食)

とうろYH...塘路駅-(釧網本線)-釧路駅-(釧網本線)-茅沼駅-憩いの家かや沼(茅沼温泉)-茅沼駅-(釧網本線)-塘路駅...とうろYH (釧路湿原とうろYH)

釧路川カヌー下り

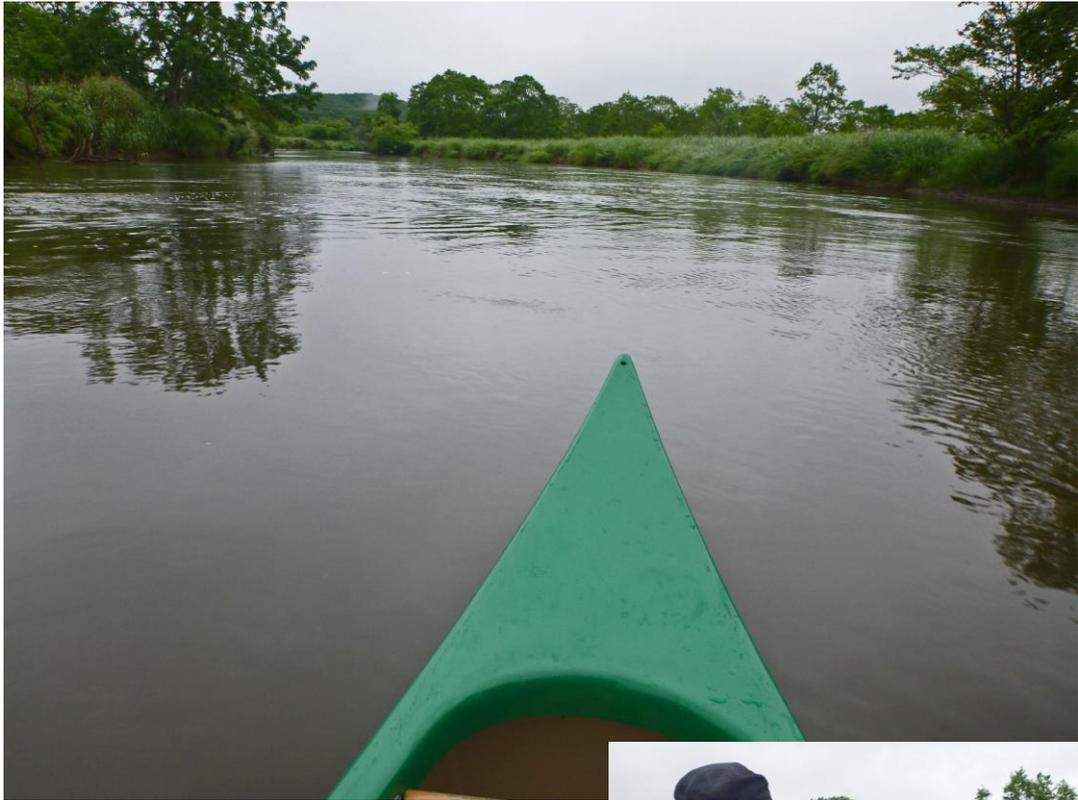
今日は釧路湿原を内側、つまり釧路川をカヌーで下りながら見ることにした。しかも、早朝の釧路川は川霧が立ち込め、幻想的な雰囲気のある湿原を見ることができるとも可能性がある。5時出発なので、4時半には起きて準備をした。カヌーの定員はガイドを含めて3人である。昨日湿原探索を一緒に行った東京からの男性も希望していたが、「朝早いのは苦手だから」と辞退してくれたので、自分と、大阪からバイクで昨日到着した女性とガイドと3人で行くことになった。車の屋根にカヌーを積んで、釧路川上流のカヌー出発地点に女性ペアレントが運転して向かった。

自分がカヌーの最前列、大阪の女性が真ん中、最後尾がガイドで早朝の釧路川を下った。意外と流れが速く濁っているが、パドルを漕いだときの水音と、たまに聞こえる小鳥のさえずり以外には音の無い静寂の世界は、自分の体がどんどん透明になっていくような心地よさに包まれる。ガイドも余計な説明はしない。護岸されていない自然のままの川岸には、鹿のファミリーが警戒することも無く寛いでいた。流れが淀んだところにカヌーを寄せて、ティータイムとなった。ガイドが暖かいお茶とお菓子を用意するという粋な計らいをしてくれた。再び流れに戻ったが、去年の台風の影響による倒木が川の中に障害物としてあるので、慎重にカヌーの進路を見定めなければならないが、それはガイドがしてくれるから安心だった。ヤチダモの大木とか、枯れ木の中を音も無く、時折パドルの水音(自分のパドル操作が下手なため)だけが聞こえるだけで、風もなく穏やかな川下りは、川霧を見られなかったのは残念だったが、予想通り、日常生活の喧騒を洗い流すことができるものだった。

yokobronco

1時間半の川下りを終え、YHまで1kmあまりを大阪の女性と二人で歩いて帰ったが、話しているうちに、この女性はなかなかの旅をしているのがわかった。大阪から愛車ヤマハブロンコで来たが、富良野で故障して動かなくなり、その代車のマジェスティのスクーターでここまで来たらしい。普通であれば、富良野界隈を回って修理が終わるのを待つのだが、釧路まで慣れないスクーターで、エアニーグリップをしながらよく走ってきたものだ。別れ際、インスタグラムをしているのを知ったので、後で見してみたが、予想通り充実した旅をしていた。歳は40過ぎだと思うが、同年代の女性の発想とはかなりの隔たりがあるくらい活動的だが、おそらく自分では特別なことをしているとは思っていないだろうし、そのように感じさせないところが良い。また、インスタに毎日よくもまあこんなに書くことができるものだと感心した。熊注意の看板にビビりながらも、秘湯を目指してオフロードを走り、無人の露天風呂(当然混浴)に入ったり、怪しげなライダーハウスにも平気で泊まったり、度胸が据わっている。アマゾンの先住民族を撮り続ける女性カメラマンは、心を通わせるために、自分も同じようにほぼ全裸になり、十代で8大陸の最高峰を登頂した女子大生の冒険家などと、スケールの差こそあれ、相通ずるところがありそうだ。yokobroncoで見ることができる。ここ数年、北海道を旅して感ずるのは、生き生きとした旅をしている、あるいは破天荒な生き方の若い男と逢う機会が少ないことだ。過去に印象に残っているのは、3、4年前に旭岳温泉YH白樺荘で出会ったアメリカの大学院生だ。日本人以上に正しい日本語を話す人で、「東北で魅力的な所はどこで

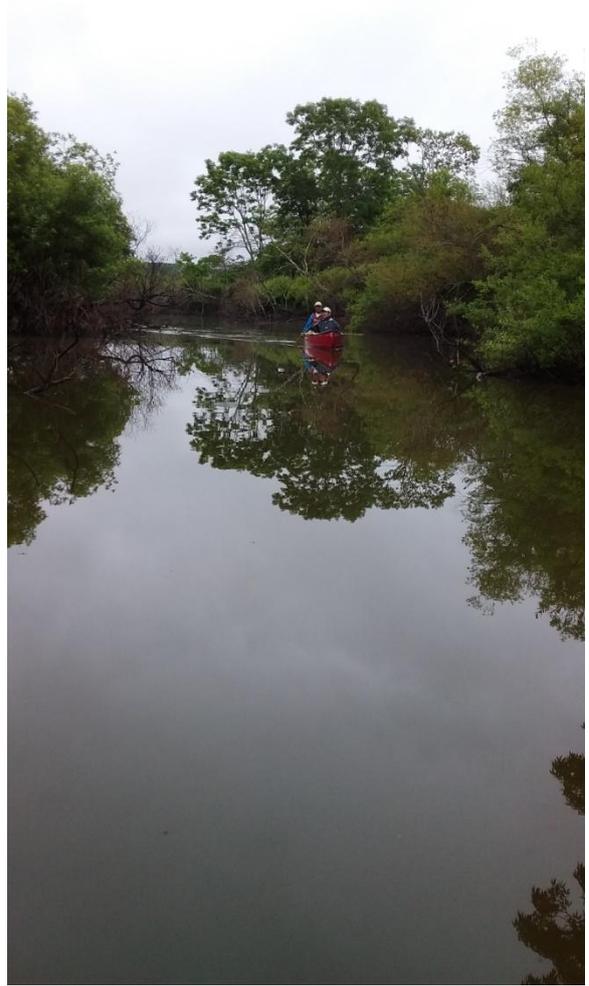
すか」と聞いてきたので、歴史的背景と自然の豊かさを理由に、迷わず「庄内です」と教えたが、果たして行った
だろうか。



【カヌーで釧路川を下る】



Yokobroncoとカヌー





【釧路駅前和商市場】



YHに戻ってから朝食をとり、天気も良くないので、電車で釧路湿原を見ることにした。釧網本線は国道より釧路湿原の中を走っているのである。観光客相手のノロッコ号も走っているが、自分は普通列車を利用して、釧路まで行った。一両編成の電車は湿原の真只中を走っていくので、車では見ることをできない手付かずの湿原を見ることができる。釧路駅前の有名な和商市場に行った。釧路港にあがった魚がふんだんに扱われているが、値段も高い。この市場は観光客相手の市場のようだ。立派なトキシラズに手が出そうになったが、ここで送っても仕方が無い、だいたい高すぎる。しかし、この主人は、「このトキは並べているが、ほとんどは料亭が買うことになり、一般の人はなかなか買えない」と言っていた。それから、今年トキの漁獲量が少なく、例年より3割くらい高くなっていることと、普通の鮭との見た目の違いなどを教えてもらったが、それでもよく分からなかった。しかし、魚が本当に好きなんだということが伝わってきて、楽しいひと時だった。そのあと、勝手丼なるものを食べた。最初にご飯を買って、その上に自分の好みで選んだ海鮮を載せていくのであるが、なかなか旨

かった。

知られざる名湯茅沼温泉

YHで萱沼温泉のことを教えてもらっていたので、釧路から萱沼へ向かったが、普通列車にもかかわらず、ツアーの団体客のため、一両編成の車両は満席状態だった。しかし、塘路でほとんど降りたので、塘路、茅沼間の一番見たかった部分は落ち着いて眺めることができた。確かにこの区間は、全く人工的な痕跡のないヤチダモが生い茂る湿原の中を走ったり、急に開けて湿原が広がったりと飽きない。茅沼で降りたら、「憩いの家かや沼」の送迎車が止まっていたので、それに乗った。

学生の時、「シラルトロ湖」という名前に惹かれて、湖まで歩いたが、林に遮られて展望は良くなかった。しかし、林の切れ間から湖が見えるところで、タンチョウの姿が見えたことは記憶にある。そして、駅前の民家のお年寄り夫妻に呼びかけられ、縁側のような所でカボチャの煮付けをご馳走になった。50年も前のことだ。茅沼駅前の1本の大木だけは当時の木だと思う。

道東の地方新聞に、北海道一の温泉と紹介された記事をYHで見たが、確かにいつまでも入れる気持ちの良い温泉だった。電車の旅とあれば、湯上がりのビールも飲める。ついでに地酒が目についたので、勿論これも頂いて、最高の気分で帰りの電車に乗ったら、アジア系旅行者が一人ずつ席に寝転がって占領していた。何という光景だ。自分は次の塘路駅で降りるからよいが、マナーが悪いとかの以前の問題だ。今晚の宿泊は自分一人だけだった。食事をしながら女性ペアレントと世間話をし、サルナシ酒を飲み過ぎた。今年還暦と言っていたから自分と一回り違いの酉年だが、四年前より少し頭が白くなったかもしれないが、多くの旅人を相手にしているせいか、雰囲気は若い。



7月19日(水)

釧路湿原とうろYH-R391-釧路-R44-厚岸-別寒辺牛湿原-R44-

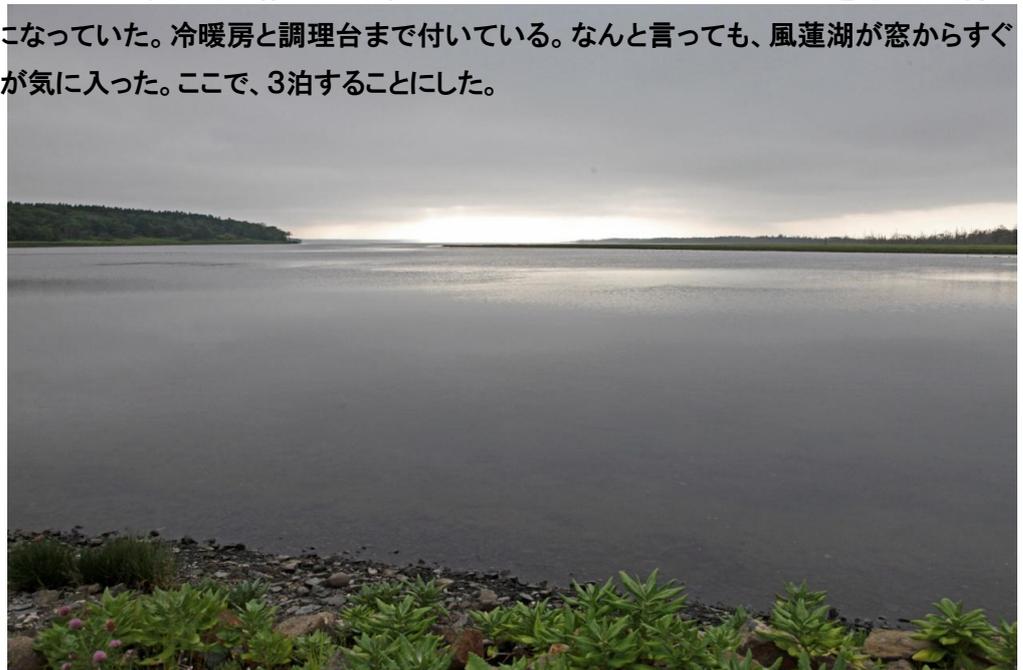
道の駅スワン 44 ねむろ-風蓮湖

(コテージ・レイクサンセット) (128km)

風蓮湖畔のコテージ三泊

夕べのサルナシ酒が効いたのか、今朝は少々体のキレが悪い。天気は今にも降りそうだし、寒い。走り始めからインナーダウンを着て、雨具も着た。女性ペアレントに見送られ、走り始めたが、ダウンを着て正解だった。今日の天気と体のコンディションからして、北太平洋シーサイドラインは走る気になれず、一気に最短距離のR44を走り、風蓮湖を目指すことにした。北太平洋シーサイドラインは何回も走っているが、R44はあまり記憶にない。交通量はあるものの、畑作地帯は全く見当たらない起伏のある牧草地帯を走るのも捨てがたい。特にこの時期は、釧路市の花のハンドイの白い花が満開で、道路周辺は香りの良い香水の中を走っているようだ。根釧国道などという味も素っ気もない名称がついているが、まさに香水国道だ。混雑している道の駅厚岸グルメパークは寄らず、R44は霧多布方面と反対方向に進むと、やがて雰囲気の良い湿地帯が現れた。別寒辺牛湿原である。休憩を兼ねて、その水鳥観察館に入ったが、タンチョウの卵がこんなに大きいとは知らなかった。ソフトボールを潰したくらいある。

根室までの距離を示す標識の数字が減ってくるにつれ、体感温度はドンドン低くなる。海からの湿気の多い霧と低温では、畑作は不可能だから酪農しかないのだろう。根室が近づくにつれ、路面に「シカ注意」の文字がやたらと多くなった。以前、北太平洋シーサイドラインを気持ち良く走っているとき、突然目の前に子牛ほどの鹿が現れた。何とか衝突は回避したが、コーナリング中だったら衝突転倒の危険があっただろう。その記憶がトラウマのごとくあるので、自分にとっては「スピード注意」より効果的である。道の駅「スワン 44 ねむろ」で食べた暖かいカシワソバは、体が冷えていたこともあるが、出汁が思いの外旨かった。レイクサンセットは風蓮湖の湖畔に面したコテージだった。外観はどこにでもありそうな作りだが、中はビジネスホテルのシングルルームをそのまま持ってきたような快適な作りになっていた。冷暖房と調理台まで付いている。なんと言っても、風蓮湖が窓からすぐ目の前に広がっているのが気に入った。ここで、3泊することにした。



コテージの窓からの

風蓮湖の日没

7月20日(木)

コテージ・レイクサンセットー春国岱ー花咲港ーコテージ・レイクサンセット

(コテージ・レイクサンセット) (22km)

風蓮湖湖畔のコテージは、料金が安い割には快適すぎる居心地だ。目の前が風蓮湖で、右手に春国岱の砂州に出来た森、真ん中には太陽が沈み、左には原生林の岬が突き出ている。風蓮湖のさざ波が左から右へ流れ、霧がこの景色を時折消したりして刻々と変化する濃淡の世界を楽しませてくれる。霧に覆われ、乳白色の中に、立ち枯れの白いエゾドマツが墓標のように浮かび、その手前で、どこからともなく現れたエゾシカのファミリーが何事もないように草をついばんでいる様は、あまりにも幻想的で、時の経つのも忘れてしまう。こんなロケーションは他にあるだろうかと思ってしまう程だ。あるとき、霧に覆われた風蓮湖で、春国岱から左手の岬の方に渡るシカのファミリーを見たが、深さはシカの膝上ぐらいしかなく、霧で真っ白くなった背景に鹿のファミリーだけが浮かび上がった景色は、シュールでさえあった。遠くにはタンチョウのつがいが白く小さく見えていた。

【コテージからの景色】



風蓮湖と春国岱(右奥)



春国岱のエゾシカ





タンチョウが飛んで行った



風蓮湖を渡るエゾシカのファミリー

奇跡の島「春国岱」

今日はノンビリと“奇跡の島”と言われる春国岱を探索することにして、飲み物、非常食、カメラ道具、雨具を持って出かけた。駐車場からすぐの春国岱入口でタンチョウのつがいのお迎えを受けた。探索路を歩いて行くと草原でシカのファミリーが寛いでいた。心細いような木製の橋を渡って、いよいよ春国岱の核心部に入り、シカを間近に眺めながら、トドマツの林の中に入っていこうとしたら、突然探索路が途絶えた。「高潮被害のため進入禁止」の看板が無情にも立っていた。海からの浮遊物が至るところに残っており、立ち枯れのトドマツの林や、泥濘地が荒涼とした風景を作っていた。半日ばかりで歩こうと思っていたのに、1時間もたたないうちに終わってしまった。



エゾシカのファミリー



高潮被害の春国岱



立ち枯れのトドマツ林



歩き出しそうな横たわるトドマツの枯れ木

春国岱原生野鳥公園のネイチャーセンターに寄って、館内を見学したあと、レンジャーらしき人に「いつの高潮被害ですか」と聞いたら、「三年前の大潮の時の高潮で壊滅状態になり、来年あたりまでは復旧すると思う」と言っていた。

花咲ガニ

すぐ近くに産直「かおと」の案内があったので行ってみたら店は閉まっていた。近くにいた軽トラのおじさんに聞いたら「土、日に開けるときもあるらしいよ」という話だった。花咲ガニのことを聞いたら、花咲港の前に店があるから、そこで買うといいと教えてくれた。そして、その次に予期せぬことを耳にした。「それよりも釣り竿持ってんだら、花咲ガニはなんぼでも釣れるよ。簡単に釣れっから」と言う。違法ではないのかと聞いたら、「カニを釣ろうとしなくても、勝手にかかってくるので、放すこともできないから持ち帰って行くのさ。小さいのは旨いぞ。ただ、この間、20パイ釣った人は捕まったけどな」と笑いながら言っていた。なんともおおらかである。こんな所で捕まりたくはないので、買うことにして、花咲港に濃霧の中を走った。花咲ガニと書いたのぼりのある1軒だけのカニ専門店はすぐ見つかった。ポイルしたばかりの真っ赤な花咲ガニが氷の上に山と積まれていた。一人だけ旅をして良い思いをしていることへの罪滅ぼしに、家に送ることにして、値段を聞いてビックリ。安すぎるのだ。昨日の道の駅の産直コーナーで売っていたカニのほぼ半値である。あまり大きいと大味になると店の人が教えてくれたので、このくらいのが美味しいというのを2ハイ送ることにした。「7月16日解禁で、2ヶ月の漁期だから貴重なんだよ」とも話していた。味見をさせてもらったが、普段食べているカニとは違う濃厚なカニの味が口の中に拡がった。



霧に霞む花咲港の漁船



視界不良が続く根室半島の牧草地帯

特別天然記念物タンチョウの求愛ダンス

視界不良の霧の中を走っても危ないだけで、なにも楽しくもないのでコテージに戻ったら、何と、タンチョウがコテージのすぐ近くまで来ていた。そして、二羽のタンチョウが求愛ダンスを激しく舞い始めた。初めて見るタンチョウのラブダンスを夢中になってシャッターを切り続けた。雄と思われるタンチョウは大きな羽根を広げ、2, 3 mぐらい舞い上がり、雌と思われるタンチョウもそれに続く形で何度も繰り返す、時折顔も近づけて何かを話しているかのような仕草もしている。国道の近くだったので、気がついた観光客が車を止めて写真を撮りだし、より近くで撮ろうと近づき過ぎたので、タンチョウはラブダンスを止めて離れて行った。自分はコテージの陰に身を潜めるようにして、しかも、EF100-400の望遠レンズで近づかないように撮っていたのに、残念だった。そして、あまりにも夢中で撮ったため、動画撮影の発想が浮かばなかったことを悔やんだ。明日、明後日もチャンスはあると期待した。しかし、この考えは自分の都合の良い考え方でしかなかった。

隣のコテージの男性も倉敷からの一人旅で、ミニバンの後ろにオフロードバイクを積んであった。「今年の北海道は天気が悪く、特に道北では一度もバイクを降ろすことがなかった」と嘆いていた。今日は雨が降っていないからとバイクを降ろし、出かけていったが、早々に戻ってきた。雨は降っていないなくても、霧のためにびしょ濡れになり、なにも見えないし、寒くて納沙布岬まで行くのを諦めて戻ってきたと言っていた。自分はそれがわかっていたので、必要最小限の所しか走らなかつた。寒い中で写真を撮っていたので、体の芯まで冷えたこともあり、コテージの暖房を入れた。7月中旬に暖房である。

【特別天然記念物タンチョウの求愛ダンス】











7月21日(金)

コテージ・レイクサンセット

(コテージ・レイクサンセット)

今日も朝から濃霧。対岸の春国岱の立ち枯れの林が乳白色の霧の中で、濃く見えたり、薄くなったり、全く見えなくなったりを繰り返し、窓からの景色に変化をもたらしてくれる。その手前の風蓮湖の湖面には、さざ波が左から右へとかなり速く流れているところから、風も強そうだ。今日は一日走る気にはなれない。この景色を眺めながら、タンチョウが近づいて来るのを待って、ラブダンスの動画を記録することを目的に、粘り強く、ひたすら待つことにした。

ここは、風蓮湖が春国岱と根室半島に挟まれて海峡のように一番狭くなっている場所だ。天気が良ければ、真正面に雌阿寒岳が見えるそうだが、3日間とも乳白色の世界が広がるだけで、山も夕陽も見えないが、刻々と移ろいゆく景色を眺めているのも飽きない。立ち枯れのトドマツが墓標のように霧の中に浮かび、草原の地平線には鹿のシルエットが単なる突起物のように点在している。まるで、時間が止まったかのような錯覚に陥る。

タンチョウは近づいては来るが、ラブダンスまではいかない。外でカメラを構えて待つのは、幾らダウンを着いても1時間が限度で、暖房の効いた部屋の中に入って温まり、また出て行くことの繰り返しだ。同じ北海道でも、帯広が30度以上になっているとは到底考えられない。この時期は毎日こんな天気だと、コテージ棟のそばにあるレストランのオーナーが言っていた。ここのレストランは思いのほか美味しい料理を作ってくれるので、食事は毎日ここで食べた。レストランの壁面にはタンチョウの写真が飾ってあるが、全部オーナーの写真だった。このつがいは春に産卵したが、卵が何らかの原因で孵化しなかったため、幼鳥はいないのだと言っていた。これから産卵することはなく、来年まで待つことになると言っていた。今は産卵のためのラブダンスではなく、仲が良い証拠らしい。結局、夕方まで粘ったが、近くまでは来るが、ラブダンスは見せてくれなかった。

霧が濃くなると、辺り一面暗くなる



渚でなにを思うかタンチョウ



魚、泥の中の細長い生き物、貝類、何でも食べる



満潮の風蓮湖 目の前の島が消えかかる 春国袋も霧に包まれた



車は昼でもヘッドライトを点灯して走る



近づくタンチョウは意外と大きい この嘴では狐も敵ではない





岸辺の花とタンチョウ

7月22日(土)

コテージ・レイクサンセットーR44ー厚床ーR243ー別海ーD8ー中春別ーD363

ー尾岱沼ー尾岱沼港ー船ートドワラー船ー尾岱沼港ーR244ーD950ー野付半島ーR244

ーR272ー中標津

(マルエー温泉俵橋) (118km)

消えゆく運命の 野付半島

昼でもヘッドライトをつけなければならない濃霧の中を、寒さと雨対策を万全にして走り始めた。厚床で給油したが、スタンドの人は、「今の時期は毎日こんなもんです」と、霧の中の生活に慣れているようだった。厚床から北上して、内陸部に入ると、不思議なくらいに霧は晴れ、目の前に張り付いていたスリガラスのフィルターが取れたように、鮮明な牧草地帯が両側に続いた。こんな天気だから、どこへも寄らずに中標津の宿に行こうと思っていたが、別海あたりから久しぶりの青空が見えてきたので、急に気が変わり、野付半島に行くことにした。

頭の中に地図は入っているので、中春別から右折し、起伏のある牧草地帯の農道に、Vツインの排気音を轟かせながら海岸線を目指し、これからの予定を考えた。前々から尾岱沼港からの定期便の船に乗って、野付半島に行ってみたいと思っていたので、尾岱沼港に行くことにした。港は晴れて暑かったので、着ていたダウンやら雨具を全部脱いでスッキリした。100kmも走っていないのに、今朝の霧に包まれた暗い世界とはあまりにも違う、開放感に満ちた爽やかな船上から眺める野付半島は、砂嘴であることを強く感じさせるものだった。船が減速して、アザラシの生息域を案内してくれた。数十頭が群れを作って泳いでいた。船が近づくことには慣れているようで、警戒することもなく泳ぎ回っていた。船に乗らなければ見られない光景だった。

やがて、にわか作りの栈橋に船は着いた。そこから渚を歩いて20分ほどでトドワラに着いたが、当然といえば当然、トドワラは土に還る寸前だった。確か数年前は立ち枯れのトドマツの林が立っていたが、今は殆ど倒れて木の株の部分しか残っていない。トドワラよりも遠浅の美しい渚のほうが見応えある。車で来たら、かなり歩いてこないと見られない光景だ。船のガイドが話していたが、野付半島は100年後くらいには水没して消滅してしまう運命とのことだった。地殻変動と環境変化によって毎年少しずつ沈んでいるそうだ。そうすれば、北海道でも有数の漁場が消えることになる。



野付半島への定期観光船



仮設棧橋近くの渚 遠景は野付半島



切り株のようなトドワラ 遠くの建物はビジターセンター ここを道路が通っている

【野付湾のアザラシ】





船上より野付半島の突端



野付半島道路よりナラワラ トドワラと同じ運命が待っている



野付半島に咲き乱れるアヤメかハナショウブ

船から下りて、今度はバイクで野付半島の先端部を目指して走ったが、灯台の手前にゲートがあって、一般車両は進入禁止になっていた。革パンを履いたまま歩いて行くのはしんどいので、ここでUターンをした。帰りにナラワラの写真を撮ったが、ここもトドワラと同じ運命にある。東日本大震災を経験している者として、このような地形を走っているのは一抹の不安が付きまとう。津波が来たらひとたまりもない地形だから。

今日の宿は、以前一緒にバイクで北海道を走った関水さんが、「中標津に行ったらこの宿が良いよ」と教えてくれた所だ。中標津郊外のなんの変哲も無いビジネスホテルのような宿だったが、温泉はなかなか良かった。それよりも驚いたのは、夕食だ。ビジネスホテルと同じようなビュッヘ形式の料理を想像していたら、見当違いだった。レストランのおばちゃんも田舎料理だからと謙遜していたが、そもそもどこの国の料理も田舎料理なのだ。その田舎料理の種類があまりにも多いのである。田舎料理と言っても、ミシュランガイド掲載のレストラン(と言うよりは食堂)なのだ。そして、面食らったのは焼き肉用の豚ロース、豚バラ、ラム、マトンが山となって置かれてあったことだ。そばには焼き肉用の炉と鍋と燃料も置いてある。今まで、結構なホテルのバイキングも経験してきたが、そんなレベルをはるかに超えている。食い意地を張って食べた結果、動くのも辛い状態になってしまった。

7月23日(日)

中標津—R272—(ミルクロード)—R44—釧路—(釧路外環状道路)—R38—白糠—R38—道の駅うらほろ—R336—十勝河口橋—R336—晩成温泉 (晩成の宿)(197km)

ヨード含有量日本一の温泉・晩成温泉

朝食のバイキングも、夕食にしてもおかしくないくらいの十分な料理が並んでいた。お昼抜きでもいいくらい頂いて、支配人に御礼を言って出発した。従業員の対応も含めて気持ち良く泊まることのできる宿で、しかも安いから言うこと無し。

朝方まで降っていた雨も止んだが、天気はあまり芳しくないので、今日の目的地の晩成温泉に最短で行くことにした。中標津から釧路までのR272はミルクロードと言われているくらい牧場が多く、手入れの行き届いた牧草地の中を快適に走ることができた。個人経営の牧場より、会社形式の牧場が目立つ。サロベツの酪農もそうだが、これからの酪農業は、自由貿易の中で生き残るためにはそれしかないだろう。



釧路市街をバイパスする外環道を走り、白糠のガソリンスタンドに給油のために寄った途端、スタンドの人も慌てるほどの豪雨となった。給油のために屋根付きの所にバイクを止めたから危機一髪で助かった。そのまま屋根の下にバイクを止めさせてもらって、雨具の準備をしたが、お陰で全く濡れないまま雨具を着ることができた。

海岸線を走るR38は交通量が多いが、比較的安心して走られる道路だ。ただ、時々通過する街の前後は速度測定に気をつけなければならない。トイレ休憩以外はほとんど走りっぱなしだったので、道の駅「ウラホロ」でコーヒータイムをとり、十分に体を休めた。ここまで来れば目的地は遠くない。

主要国道の38号線からR336に入ると、ほとんど車が通らない。今まで暫く見ていなかった畑作地帯の景色が広がってきたので、気分的にもホッとした。最初はデントコーンとビートが殆どだったが、そのうちジャガイモが多くなり、今が花盛りだ。大雪山系と十勝岳連峰を水源とする十勝川に架かる十勝河口橋からの景観は、北海道を象徴するかのように雄大な広がり、溜息が出る。この川の恩恵で豊かな十勝平原が広がり、そこで穫れる農作物が人々に恵みを与えてきた。

そして、この1kmに近い長さの緩い勾配のアーチ型の橋は、橋の向こうが見えないため、峠道と同じように、渡った向こう側はどんな世界が広がっているのだろうか、期待を持たせる効果がある。



十勝河口橋より太平洋を望む

以前、春日、関水両氏と3人で走った記憶の残る道になったので、晩成温泉はもうすぐだ。数年前、3人で走った時、セキレイ館という「とほ宿」に泊まり、晩成温泉に入りに行ったのだが、ヨード成分が日本一のヨードチンキを流したような温泉が気に入って、その時、宿泊施設もあることが分かっていたので今回泊まることにした。殺菌効果の強い、ヨードチンキの色の温泉に入っていると、体の表面だけでなく、体内のバイ菌も殺菌されるような気分になる。ついでに、心の中のバイ菌も殺菌して欲しいと思った。自分の爪先が見えないくらいの濃い赤茶色をしている。

7月24日(月)

晩成温泉—R336—D55—R236—忠類大樹IC—帯広広尾自動車道—帯広Jct

—道東自動車道—十勝清水IC—R274—南富良野—R38—狩勝峠—D465—かなやま湖—

R237—R38—山部—D985—国分農園—富良野—R38—D135

—島ノ下温泉ハイランドふらの—D135—R38—富良野

(佐藤さん宅)(240km)

狩勝峠

晩成温泉の朝は、風蓮湖の濃霧に匹敵するくらい真っ白だったが、明るいので朝だけの霧と思った。宇宙開発の基地として有名になった大樹町にある晩成温泉。大器晩成をもじって銘々したのであろうか。当初は町営だったが、今は第三セクターで独立採算だから厳しい、とオーナーは嘆いていた。

これだけの特異な泉質を全面に出して宣伝すれば客は来ると思うが、今の施設を新しくしなければならない。そこに問題があると言っていたが、温泉を利用している町民にとっては今のままで良いのかも知れない。なんと書いても一泊二食着き5600円の低料金だから。

大樹町、幕別町はナウマン象の化石だけでなく、他にも見るところが多いのだが、今回はパスして、帯広広尾自動車道に乗った。この道路は高い所を走るし、交通量が少ないから、十勝大平原の穀倉地帯を眺めながらの走行は、Vツインエンジンの本領発揮で、体の下から突き上げるような心地よい鼓動を感じながら走ることができた。帯広市街をバイパスして十勝清水で下りて、狩勝峠を目指して走った。新得で「そばの館」の看板につられてバイクを止めた。一見旨そうな感じがしたので、新得地鶏南ばんせいろを頼んだ。地鶏の汁は美味しいが、肝心のそばは普通だった。



新得のソバ



狩勝峠の傍らに立つ石碑と十勝平原

道東自動車道開通のためか、狩勝峠を越える車は少なくなり、バイク乗りには好都合だ。ここは三国峠同様、前後に車がなく、路面が濡れていなかったら高速ワインディング走行を楽しむことができる。今日はそれができた。今まではこの峠は

通過するだけだったが、今日は頂上でバイクを止め、広大な広がり十勝平原を眺め、近くにこの道路開設の殉職者のお地蔵様があることを知ったが、この暑さの中、革パンで草むら歩きのはやめた。

「北の大地」の旅の拠点・富良野



南富良野が近づくとつれ、去年の台風による大洪水の爪痕がまだ残っているのを目の当たりにして、自然のエネルギーの巨大さの前には、人間の非力をまざまざと痛感するしかなかった。時間的に余裕があったので、かなやま湖経由で富良野に向かい、山部から急遽、国分農園に行くことにした。頂上が岩峰の芦別岳の麓に広がる肥沃な山部地方は、寒暖の差が大きく、ここで育つメロンは特別に美味しい。数年前から国分さんとは知り合いになり、毎年訪れてメロンをご馳走になっている。ある年はメロンハウスで、メロン栽培の手伝いまでしたこともあった。今回も急な訪問にもかかわらず、美味しい赤肉と青肉の富良野メロンをご馳走になった。青肉の爽やかな甘さと赤肉の濃厚な旨さが際立っている。今晚、「雛」で落ち合う約束までして、ひとまず富良野を目指した。

国分農園のメロン この贅沢な食べ方

今までの常宿のロッジ・アイガーは3月で閉館したので、オーナーの自宅に泊めてもらうことにしているが、その前にまだ時間もあるので、「ハイランドふらの」の温泉に行った。

それから、オーナーだった佐藤さんと一年ぶりの再会を喜び、好意に甘えて泊めてもらうことにした。夕食は外で食べるつもりだったが、佐藤さんが美味しい鮭を用意してくれて、富良野に来た時はいつもお世話になっていた次男とも一緒にご馳走になった。その上、次男に「雛」まで送ってもらった。

国分さんは先に来ていた。昼間の作業着の姿とは違い、おしゃれな格好で飲んでいて、一緒に飲みながらいろいろ話しをしたが、狐がメロンを食べることを聞いて驚いた。狐は肉食動物と思っていたが、どうやら雑食らしい。タヌキ、アライグマもメロンを食べるとも言っていた。それだけ山部のメロンは美味しいということの証かな。



富良野の「雛」で、国分さん、ママの友紀さん、知穂さん

「雑」は繁盛しているようで、女の子が3人に増えていた。三年前からのチホはあか抜けした感じで、この仕事を楽んでいるようだ。考えて見れば、こういう接客商売は、頭を使った話術に長けていないと勤まらない。笑顔だけを振りまいていても仕事にならないのだ。ママの友紀さんとは20年以上の仲だが、独立してからもよくやっている。去年入れておいた焼酎がまだあった。いつも飲んでいた「さそり」が無く、その代わりに「もぐら」を入れたのだが、「もぐら」の字の下に小さく「土龍」と書いてあるのを国分さんが見つけ、もぐらと読むんだと教えてくれた。子供の頃、モグラを飼育したこともあったが、そういう読み方は知らなかった。1年に1回寄る店と、知り合いがいることに感謝しながら、いつものごとく飲み過ぎ、午前様になってしまった。

7月25日(火)

富良野ーR237ー中富良野・彩香の里ー六花亭ーR38ーハイランド温泉ーR38ー富良野

(佐藤さん宅) (45km)

彩香の里のラベンダー

昨夜の深酒のため、なかなかアルコールが抜けない。遅い朝食を頂いてから少し休み、天気も良いし、時期的にもラベンダーが見頃のはずなので見に行くことにした。富良野付近にはラベンダーの見所は沢山あるが、彩香の里が一番好きなので、そこだけを目指した。二日酔い気味でしょぼくれている目には、一面に咲いているラベンダーの紫色は突き刺さるように眩し過ぎた。風蓮湖半の寒さが嘘のように暑い。日陰の東屋で座りながらボンヤリとラベンダー畑を見るとはなしに眺めていたが、観光客から聞こえてくるのは日本語ではない。不思議なことに欧米人はこういう所でほとんど見かけない。



彩香の里のラベンダー

カンパーナ六花亭

食欲も出てきたので、目当ての、ふらのワイン工場の前にあるカンパーナ六花亭の中にあるジンギスカン白樺に急いだ。オーダーストップの2時に危うくセーフだった。去年、ここでラムを食べて、あまりにも美味しいので、富良野に来たら必ず食べようと思っていた。玉ねぎがもつと多いと言うこと無しなのだが、そして、1年に1回くらいしか飲まないノンアルコールのビールを飲みながら旨いラムを食べた。小のご飯を頼んだのに、持ってきたのは結構多かったので、「これで小？」と聞くと「ごめんなさい。間違えました」と取り替えてくれた。「お手数をかけますね」と言うと「誠に申し訳ございません」と平謝りしていたが、そんなに謝るほどのことではないが。



旨いラム肉

隣のギャラリー「神々の遊ぶ庭」では綿引幸造の写真展が行われていたので入ったが、六花亭は混雑しているのに相変わらずここには誰もいない。お陰で静かに鑑賞できた。イサムノグチの作品を撮った写真の作品であるが、人が作った作品を撮って自分の作品にするという発想は、自分にはよくわからない。イサムノグチの作品の魅力を引き出すのが一番の目的なのか、それとも、自分の写真作品のための、悪く言えば

道具立てに過ぎないのか、ただ言えることは、イサムノグチの作品を知らない人が見ても、ある写真は力強く、あるいは壮大なスケールを、あるいは繊細な世界を感じることができると思う。彫刻がもたらす自然との融合、調和を目指しているのだろうが、彫刻を作る人は当然そのことを考えて作るわけだから、直接、彫刻の作品を自分の目で見て感じる事が一番だと思う。



ギャラリー正面は1枚ガラスの窓 十勝岳連峰が額縁に納まる



ここでの作品展は、この額縁に負けないような作品を用意しなければならない

今日もハイランド温泉で寛いで、夕食は外で食べることにした。富良野の北の峰付近は、来る度に変わっている。無くなった店、新しく出来た店など様々だが、すぐ近くにあった、人気の「ロイズ」の店がなくなり、その後に食事処が開店していたので、どんなところなのかと入って見た。一つのテーブルを残して満席状態だったので、ここで食べることにした。上富良野産の豚ロースを使った、野菜サラダが沢山のカツカレーを注文した。何故か、富良野に来るとカレーが食べたくなる。本当は有名な「ふらのや」まで行けば良いのだが、歩いて行くには少し遠いのだ。途中で気がついたのだが、客30人中、日本人は自分一人だった。あとは全て中国人だけだったし、後から来て、満席で帰る人も中国人だった。店の接客を一人で苦労しながら話している女性に、支払いをするときに「大変ですね。毎日こんな状態ですか」と話しかけると、「そうなんです。毎日外国のようなものです。今日は日本人二人目です」と、ホッとされたように話していた。帰ってから佐藤さんにその様子を話したら、コテージが増えて、外国人が利用するからでしょうと言っていた。やはり、日本人の観光客は2食付きのホテルを利用するので、夕食時は外に出てこないのだ。富良野も冬のニセコと同じように時期限定で外国人に乗り取られてしまうようになりそうだ。

7月26日(水)

富良野—D985—山部—R237—占冠IC—道東自動車道—夕張IC—R274—D462—
追分町IC—道東自動車道—千歳恵庭Jct—道央自動車道—千歳IC—D16—
千歳川フライフィッシング練習場—D16—R38—D259—苫小牧フェリーターミナル (250km)

千歳川の師匠の指導

富良野で2泊お世話になった佐藤さんに十分に感謝し、富良野を後にし、通り慣れた山部北の峰線から金山峠を越えて占冠道の駅に寄った。ここには佐藤さんの次男が店長として勤めているので、お世話になった挨拶がてらに寄ったが、開店が9時からで閉まっていた。今日は寄るところもある関係、開店を待っている訳にもいかず、占冠ICから高速に乗ったが、乗ってから「しまった」と思った。道東道のこの区間も長いトンネルだらけなのだ。排ガス充満のトンネルの連続には絶えきれず、夕張で一般道に下りた。

しかし、フライフィッシングの師匠がいる千歳川の練習場まで、一般道で行ったら、練習時間がなくなるので、追分町からまた高速に乗った。



ラインそのものが生き物のように飛ぶ本田さんのキャストイング

連絡もしていなかったのに、本田さんはいるかどうか分からないが、いなかったら一人で練習するつもりで行ったら、愛犬八男が先に気づき、次に本田さんが迎えてくれた。例によっておいしいコーヒーをご馳走になり、今日は早速キャストイングを教えてくださいと、すぐ傍の練習場に行った。

千歳川の水の流れは、本来の川の姿を見せてくれる。水の色と水量がその原因だ。驚いたことに、こんな大きな川なのにバイカモが生えている。水が綺麗だという証拠だ。本当は北海道に上陸した初日に教えてもらおうと思っていたが、その日は彼が企画しているフライキャストイングの大会の翌日のため、後片付けで忙しいと思ったから今日になってしまった。休憩を挟んで2時間弱の練習を指導してもらったが、以前より一段と教え方が上手くなっているのに感心した。スベイクキャストイングの原理を説明するのに、弓の引き方とか野球のピッチングを例にとり、自分のような低レベルの者にも意欲を持たせるように褒め、分かりやすく説明してくれるのを見て、この人は学校の先生になったら、生徒に尊敬されること間違いなしと思った。腕がかなり疲れたので終わりにしたが、今日、ここで納得しても、続けてやらなければまた忘れてしまうだろうと思い、なんでも反復練習だから、家に帰ったら練習しようと自覚するのだが、はたして出来るだろうか。

この旅で、あとは思い残すことはない。旅の終わりに、充実した練習の一時を持つことができたのは、今回の旅を十分に締めくくってくれた。あとは、ひたすら苫小牧港フェリーターミナルを目指した。早めに着いたこともあり、バイクとしては一番前に止めた。遂に今年の旅も終わってしまったという思いと同時に、事故も無く、無事に終わられたことは、家族をはじめ、多くの人々のお陰であると感謝した。

トラブル無しで走ってくれた FLSTC にも感謝



7月27日(木)

仙台港フェリーターミナルー仙台港ICー仙台東部・南部自動車道ー山田ICー自宅

(25km)

船から走り出して、バイクの異変に気がついた。ハンドルバーが正常よりかなり下がっているのだ。そのため、サイドミラーも見えなくなってしまった。バイクを船に固定するとき、ハンドルバーにロープを掛けて強く引っ張ったからだ。去年もそれが原因で、途中でバーが動き出したためトラブルがあった。今度からはロープの掛ける場所を指定しないとまた同じ現象になりかねない。

家に着いて、「とかち」がどんな反応をするだろうかと想像して、家に到着した。恐らく、かなり遠くからバイクの音で分かっているはずだ。しかし、以外とアッサリしている。一応尻尾は振っているが、さほどでもない。それより、「自分だけ良い思いをしてズルイ！」と言っているような素振りをしている。5歳8ヶ月ともなれば、大人になったからだ。一昨年のような過呼吸の反応は子供だったからだ。それより、翌日の朝の散歩の時のほうが、全身で喜びを発散させていた。

総走行距離 1612km

道内走行距離 1562km

あとがき

全行程を通して、天気はあまり良くなかったが、登山の時の3日間の好天は奇跡的とも言えるくらいだった。待機した甲斐があったというものだ。これで、大雪山系の主要ルートは大体歩いた。オプタテシケ山と三川台間が空白なのと、化雲岳から天人峡に至るルートが残っている。しかし、去年の台風の被害で、三川台に至る俵真布の林道が未だ閉鎖になっているし、天人峡も陸の孤島に何度かなくなっているの、計画の立てようがない。大雪山は一度、二度行ったからもう良いと言うような山ではない。幾らでも遊ぶことのできる山だ。この旅行記を書きながらも、このルートはどうか、ここに2泊したら面白いのではと、色々なプランが湧いてきて楽しい。山は人間にとって、携帯浄水器のようなものだ。太古の昔から、山には神がいると信じ、山を崇め、そして、山に登った。大雪山系を歩き回っていると、確かに、アイヌの人々が「カムイミンタラ」(神々の遊ぶ庭)と呼んだのが分かる気がする。縄文の人達、アイヌの人達が見た同じ景色を、ほとんど同じに見ることができたことには大きなロマンを感じる。

風蓮湖畔の3泊4日間は、毎日乳白色の世界で生きている人達の世界を認識し、ここで普通に生活している人間の生命力の逞しさを感じた。一目でも見られれば幸運と思われる、特別天然記念物のタンチョウを毎日見られ、求愛ダンスまで見ることができたのは運が良かった。

バイク、山、釣りの三本立ての旅をしてきたが、難しい曲面にさしかかってきた。三本立てのためには、それなりの道具を積載することになるが、車だったら問題なく積めるが、バイクの場合には難しい。いずれにせよ、来年もまた走ることになるだろう。

神々の遊ぶ庭

「美術館」と呼ぶには

いさ、か抵抗があった。

大窓から望む十勝岳連峰の稜線。

自然にかなうものはない。

先住民・アイヌは

北海道の最高峰、大雪山系に

畏敬の念を込めて

「カムイミンタラ」と呼んだ。

四季折々、

表情を変えながら

我々を見守る山並みを拝むにつけ、

先人たちの

絶妙なネーミングに舌を巻く。